

第1回福山大学教育改革シンポジウム報告

大学教育センター

1. はじめに

平成26年8月9日(土)、福山大学1号館1階の大講義室において、第1回福山大学教育改革シンポジウムを開催しました。第1部のFD・SD講演会では、大学教育改革におけるわが国の第一人者で、帝京大学高等教育開発センター長の要職に就かれている土持ゲーリー法一教授に「大社連携(Community Engagement)の重要性」と題してご講演を実施していただきました。また、第2部の本学の特色ある教育「大学と地域との絆」では、本学教員4名が大学と地域との絆に基づいた、教育の取り組みについて事例報告を行いました。

これまで学内行事として実施してきたFD・SD研修でしたが、広く一般に公開することで本学教育改革の取り組みを理解していただくとともに、広島県東部地区の教育改革を連携して推進したいという思いから、一般に公開する形で実施いたしました。事前に福山市立大学、尾道市立大学、福山平成大学の教職員全員にシンポジウムのリーフレットを配布するとともに、県内27の大学と短期大学すべてにリーフレットを郵送いたしました。また、高大連携から高大接続、高校と大学の教育を連続した流れで構築することが求められる中、高大連携校の教職員全員にシンポジウムのリーフレットを配布しました。報道関係では、中国新聞も開催記事を掲載していただきました。

初めての公開シンポジウム、日程がお盆前の土曜日の午後、そして、数日前から台風が福山地区を直撃するという天気予報などが重なり、参加者に集まっていたのかという心配がありました。しかし、大学教育改革への教職員の関心は高く、168名の参加者となり、福山市立大学、広島国際大学からもご参加いただきました。特に、福山平成大学からは、田口則良学長を含め27名の教職員の方々にご参加いただきました。そして、台風もシンポジウムの終了まで速度を緩め、福山・尾道地区に警報が発令される前に、無事にシンポジウムを終えることができました。



写真1 シンポジウム会場の様子

2. シンポジウムのプログラム

シンポジウムは、定刻通り、13時から松田文子学長の挨拶で始まりました。当日のプログラムは下記の通りです。

13:00～13:05 学長挨拶

松田文子（福山大学学長）

13:05～14:25 第1部 FD・SD 講演会

題目：「大社連携（Community Engagement）の重要性」

講師：土持ゲーリー法一先生

帝京大学高等教育開発センター長・教授

14:35～16:00 第2部 本学の特色ある教育「大学と地域との絆」

1. 「国際経営を理解する人材育成と備後企業の取り組み」

尾田温俊（経済学部国際経済学科教授）

2. 「松永駅前銀座商店街の3DCG ストリートビュー制作」

渡辺浩司（人間文化学部メディア情報文化学科准教授）

3. 「フィールドワークによる自己省察力育成の試み」

脇 忠幸（人間文化学部人間文化学科講師）

4. 「コミュニケーション交流学習ーホスピタリティの涵養とコミュニケーション能力の向上をめざしてー」

井上裕文（薬学部薬学科准教授）

3. シンポジウムの内容

（1）第1部 FD・SD 講演会

題目：「大社連携（Community Engagement）の重要性」

講師：土持ゲーリー法一先生（帝京大学高等教育開発センター長・教授）

シンポジウムは第1部がFD・SD講演会であり、帝京大学高等教育開発センター長の土持ゲーリー法一先生のご講演でした。土持先生のご専門は、戦後教育改革史、比較教育学、大学教授法、地域学であり、いずれもわが国の第一人者として幅広い領域でご活躍されています。講演内容は、土持先生が作られた「大社連携」の話題はもちろん、アクティブ・ラーニング、ポートフォリオ、反転授業、高大接続、初年次教育など多岐にわたるものでした。そして、とても気さくなお人柄のにじみ出た、わかりやすく明快な話し方による数々の実践的な取り組みの紹介に、予定した時間は瞬く間に過ぎていきました。土持先生からあらかじめプログラム用にご執筆



した時間は瞬く間に過ぎていきました。土持先生からあらかじめプログラム用にご執筆

いただいた趣旨を下記に示します。

【趣旨】

これからの教育改革においては、「チームで達成する力、社会とのつながりで学ぶ力、世界の人とコミュニケーションできる力」を持つ人材育成が不可欠であり、「大社連携（Community Engagement）」（大学と社会の連携）との考えが重要になります。

中教審答申は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2012年8月28日)と題して、社会に出てからも学び続け、主体的に考える力の育成を大学に求めています。具体的には、「学習」から「学修」への「パラダイム転換」を促しています。これは、学生が主体的に学んだことが授業に反映されることで、学修時間を増加するだけでなく、学生のアクティブ・ラーニングを促すことにつながります。たとえば、「卒業ポートフォリオ」などを導入することで、教育目標の達成度を可視化して学生自身の4年間の成長(伸びしろ)を質的に保証し、社会での活躍につなげることができます。



写真2 土持ゲーリー法一先生のご講演風景

(2) 第2部 本学の特色ある教育「大学と地域との絆」

第2部の本学の特色ある教育「大学と地域との絆」では、本学教員4名が、大学と地域との絆に基づいた教育の取り組みについて、事例報告を行いました。

それぞれの発表は、実際の教育として地域と連携をして実践している内容であり、具体性を持ったプレゼンテーションであったため、具体的な取り組みの紹介であり非常に参考になったとのアンケートの自由記述が多く見られました。講評をいただいた土持先生からも、大社連携のお手本のような教育実践例であり、とても参考になったとのコメントもいただきました。

発表者は経済学部，人間文化学部，薬学部から4名が発表したため，学部を超えてお互いがどのような教育を学生と取り組んでいるかを知ることができ，非常に刺激を受けたとの感想が多く見られました。

4名の発表者からプログラム用にご執筆いただいた趣旨を下記に示します。

1. 尾田温俊（経済学部国際経済学科教授）

「国際経営を理解する人材育成と備後企業の取り組み」

【背景】本講義は，「平成25年度大学連携による新たな教育プログラム開発・実施事業」として広島県補助事業に採用されたものです。応募要件には，講義のテーマをグローバル人材育成とすること，大学連携（講義の遠隔配信）であること，社会人の参加，企業との連携，海外研修の実施が指定されていました。具体的な講義テーマは「国際経営を理解する人材育成と備後企業の取り組み」としました。広島県東部4大学（福山大学，福山平成大学，福山市立大学，尾道市立大学）が連携し，社会人38名を含む104名の受講生が参加しました。



【目標】日本をリードする教授陣から国際経営の基礎から最前線までを学ぶと同時に，備後企業の国際化のケーススタディを通じて，国際経営に関する多様性を理解すること。他大学の学生や企業で働く社会人が同時に受講するので，緊張感があり触発されることも多く得難い経験となるはずである。別途実施する海外研修と併せ，企業が求めるグローバル人材に必要な知識・能力の基礎を身につけること。

2. 渡辺浩司（人間文化学部メディア情報文化学科准教授）

「松永駅前銀座商店街の3DCGストリートビュー制作」

【背景】3DCGは三次元コンピュータグラフィックスの原理および作成法を学ぶ演習である。単に与えられた課題を作成するだけでなく，CGの作成技術を実際に役立てる場があることを知ってもらうために，福山大学の最寄り駅である松永駅の商店街の再現を行った。福山大学では駅前商店街と連携し，商店街を活気づける「プロジェクトM」という活動を実施しており，本プログラムはこの活動と連携する形をとった。



【目標】本課題では主に以下の4点を目指し

た。①受講者全員で一つの作品を制作する過程で「チームで働く力」を養う。②地域に積極的に出ていき、地域との連携を深めていくためのコミュニティ意識を持たせる。③作品を地元映画館や商店街内にある大学の拠点（M 亭）で発表する機会を設け、その運営や作品のプレゼンテーションを行うことで「発信力」を養う。④本課題終了後も作成した CG を活かし、地域活性化の一端を担うファシリテーターとして活動するような学生を育成する。

3. 脇 忠幸（人間文化学部人間文化学科講師）

「フィールドワークによる自己省察力育成の試み」

【背景】本学の（一部？）学生たちが抱える大きな問題＝何事にも受け身で臨むということ。まるでベルトコンベアに乗せられた機械部品のように、自分は何も動かずに周囲からのアクションを待ち続ける。このような学生に、何とかして自ら考え行動する力を身につけてほしい、という危機感にも似た思いがこの取り組みのきっかけとなった。おそらくこの問題と思いは、現在の大学教育の現場に共通するものではないだろうか。



【目標】フィールドワークを通して、地域社会で暮らす自分自身を相対化し、徹底的に考え抜く。「ベルトコンベア」状態の学生に身につけさせたい力、彼／彼女たちが身につけるべき力として、次の2つを設定した。1つは、自己を含んだ「日常」を【相対化する力】であり、もう1つはそこから課題を発見し【考え抜く力】である。その手段・材料として、学生たちは地域社会を対象としたフィールドワークをこなす。計画から報告まで他者との議論と協同が必須であり、対人的な力の向上も副産物として期待できる。

4. 井上裕文（薬学部薬学科准教授）

「コミュニケーション交流学習－ホスピタリティの涵養とコミュニケーション能力の向上をめざして－」

【背景】医療現場で薬剤師として活躍するためには、医療従事者や患者と関わり信頼関係を築くことは重要である。特に、患者と接する際には心に寄り添いホスピタリティを持って人間関係を築くことが大切であり、そのためコミュニケーション能力も求められる。コミュニケーション能力はコミュニケーションの理論を学べば身につくというのではなく、体験の積み重ね



によって身に備わっていくものである。そこで、「対人関係の気づきの体験学習」として、幼児や高齢者との「コミュニケーション交流学习」を実施することにした。

【目標】コミュニケーション交流学习では、幼児や高齢者との関わりを通じて、他人に頼られる経験をして役立ち感を掴み、自己肯定をして、ホスピタリティを育みながらコミュニケーション能力の向上を図ることを目標としている。また、行動目標として「傾聴・自己開示の重要性を一对一の交流で体験する」、「交流を通して自己の言動を振り返る」、「他者に対する感謝の気持ちを持つことができる」を設定している。教員は受入れ施設の先生方と協力し、学生が一つでも多くのことに気づけるようにサポートすることを心がけている。

4. アンケート結果

シンポジウム終了後にアンケートを提出した方は 115 名でした。「シンポジウムの内容は興味の持てるものでしたでしょうか?」という質問に対する有効回答は 107 名、その内訳は下記の通りであり、「大変興味をもてた」「やや興味をもてた」を合計すると、実に 94.4%の参加者が興味を示していたことがわかりました。

1. 大変興味をもてた	72 名	67.3%
2. やや興味をもてた	29 名	27.1%
3. どちらとも言えない	4 名	3.7%
4. あまり興味をもてなかった	2 名	1.9%
5. まったく興味をもてなかった	0 名	0%

自由記述はアンケート提出者の 3 分の 2 が何らかの書き込みをされていました。ここで多く見られた意見は、「土持先生の講演は大変有意義であり、学習から学修への転換が迫られる中、アクティブ・ラーニングの必要性と実践について、多くの示唆をいただいた」というものが主でした。特に、反転授業は学ぶべき主体が学生であることを実践し、生涯にわたって学び続ける態度を形成するにふさわしい授業であり、後期から挑戦したいという書き込みが多くありました。教員の自由記述欄に 57 名の書き込みがあり、そのうちの 18 名が反転授業への興味や実践について触れていました。

また、第 2 部の本学教員のプレゼンに対しても、福山近郊の地域と連携し、学生を主体的に活動させる取り組みとして賞賛する意見が多く見られました。そして、自らの授業にもそのノウハウを取り入れたいという意見も多く見られました。

アンケートで「今後の講演会・シンポジウムの内容について、ご要望をおきかせください」（複数回答可）と回答を求めたところ、図 1 のようにアクティブ・ラーニングに関する要望が最も多くなりました。これは今回のシンポジウムの内容がアクティブ・ラーニングに関するものであり、すべての発表に対する評価が高く、さらに理解を深めたいということが原因だと考えられます。2 番目のポートフォリオについては、学習から学修への転換に関して、学修成果に至までのプロセスをどのように学生へフ

ードバックし、学修成果を客観的に検証するための仕組みを構築するかを検討したい意欲の表れではないかと思われます。今後、これらのアンケート意見も参考に、FD・SD研修を企画していきたいと思います。

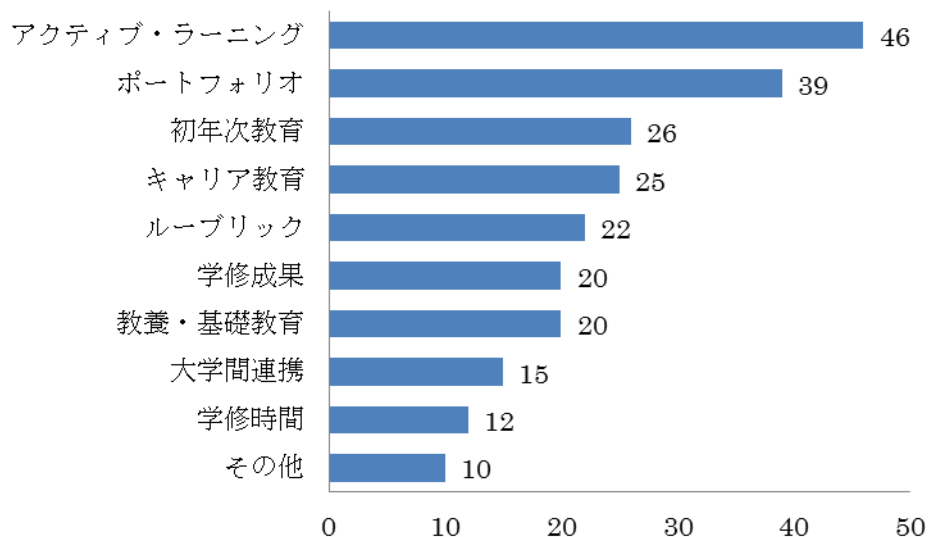


図 1. 今後の講演会・シンポジウムの内容に関する要望（複数回答可， $n=115$ ）

5. おわりに

第1回福山大学教育改革シンポジウムは、福山大学の学内研修ではなく、広く一般に公開する形で実施しました。幸いにも、学外からも多くの方々の参加が得られました。しかも、アンケート調査の結果、非常に満足度が高く、参加した教職員に新たな知識と活力を与えることができました。そして、大学教育改革を一つの大学のみで考えるのではなく、複数の大学、高校、地域と連携して遂行すべきであることも再認識できました。今後、教職員と学生、そして、社会と連携して生涯にわたって学び続ける環境を提供できるかは、教育現場での実践と検証の地道な繰り返しになります。

土持先生が「私の役目は大学教育改革の種をまくことであり、その成果を楽しみにしている」とご講演で述べられた言葉のように、まさしく大社連携の種がまかれた段階です。この種を確実に実らせるのが、大学教育に携わるすべての関係者の重要なミッションとなります。今後、第2回、あるいは、広島県東部4大学連携による教育改革シンポジウムを開催し、さまざまな取り組みやその成果が毎年発表され、全国へも情報発信できるように、今回まかれた種と芽生えた情熱を大きく育てていきたいと思えます。

（記：平 伸二）